

I Build.



人とひかりにあふれるベニスのサンマルコ広場(なぜかイタリア)

第8巻第4号
通巻第88号

久しぶりにスペインへ行ってきました。この前は冬の間の只中、年末に向かうあわただしい時でしたけれど、今回は、春から夏へと向かうひかり溢れるシーズンの入口で、街中に希望が満ちてるようでもありません。復活祭とは、キリストの復活ということですから、ヨーロッパの暗い冬を過ごしきったあと

の光の復活なのではないか、との実感が寄せられます。二週間ほどの休暇が終わり、これから夏のバカンスまで、しっかりと仕事をしなくてはいけない、と彼らは言うのですけれど、どう客観的に見ても、うきうきした雰囲気のほうが支配的でした。

(二面に続く)

発行所 東京都杉並区成田東4丁目3番44号 〒166-0015からす新聞本社


からすホームページ <http://www.go-karasu.com/> 投書・お問い合わせのE-mail : colors@go-karasu.com

今日の紙面から

二・三面からすライブラリー

CD『Napendata
本『長いお別れ』
映画『かもめ食堂』

四面(英語)
名前をどう綴る?



ここ数年、ああ、よく眠ったなあ、という満ち足りた気持ちで目覚めたことがない。勤め人ではないし、約束事が苦手なので、何時に何処へなどという用事も滅多に作らない。つまり、目覚まし時計に脅かされてあたらふたして起き出す必要などないのである。だつたら、気が済むまでだらだらするすると蒲団の中で寝転がっていいいやねえか、という声が聞こえる。その通り。私だつてそう思う。けれども、そうはできないので困っているのである。とことん爆睡してすっきり目覚める、ということの如何に素晴らしき。其は夢なりし哉。

床に就いてから、うとうととしながらもしぶとく本を繰ったり映画を観たり。そうしてこうして、いつしか本格的な眠りに落ちる、という流れ。概ね、一時が二時頃か。七時ぐらいいまでゆったりと眠れば文句などない。けれども、たったそれだけのことがうまくゆかぬ。

自律神経が壊れているんじゃないですかね、と言われれば、まあ、一概に否定もできないけれど、原因は別にある。目が覚めてしまつのは、暗闇の中、幽かに響く鈴の音の所為。寅から卯に移ろうかとする頃合い、今

では慣れてしまったもので、ああ、また今宵も鈴の音が……と、驚きはないものの滅入るような心持ち……惑わされてはいけない……無視するに若くは無しとて、意地になって目を閉じたままじつとしている。しかし、猶も、ちりりんと響きは少しずつ近づいてきて、次の瞬間、重しで肺が圧迫されたようになり、息苦しくなる。むうとうと呻き、堪らず目を開けてしまふ。眼前には、嗚呼、ほんやりと白い塊。そいつが般若のような形相で私を睨み付けている。あな恐ろしや。

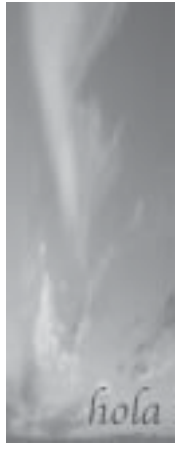
こんな有り様では逆もじやないが寝てはられない。仕方がないので早々に起き出すことになるのだが、不思議なことに私以外の家の者どもはぐっすり眠ったままなのである。彼女たちには鈴の音が聞こえないのだろうか。

兎にも角にも、こんな現象が何年も続いており、慢性的な睡眠不足に苦しんでいる。

早々に起き出した私は、寝ている人々を起さぬように静かに活動を開始する。電灯は机の上の蛍光灯一つだけ。コンピュータでの作業もキーボードはかたかたとうるさいのでマウス主体でのんびりと。そんなこんなで、効率悪くあれこれこなす。のろくさとはいえ、日が出るや否やの間から動き始めているわけであるか

(最終面に続く)

からす新聞はxxxxx
が母体となつて、世界に文化と芸術を発信すべく発行しています。
誰でも自由に参加できます(無茶じゃない範囲で)。



(一面から続く)

すでに日没は遅く、夜九時を過ぎても明るいので、人びとは外のテラスで食事をしたりグラスを傾けたりと、心地よい暖かさに身を浸しているようでありました。夏を待ちきれないといった様子です。

五月のはじめに、モナコのグランプリがあつて、その後にはテニスのフレンチオープン、続いてウィンブルドン、七月の全英オープンゴルフまで、さまざまなスポーツイベントが矢継ぎ早に行われる、この時期がもっとも重要な本場のハイシーズンなのだと感じます。そうじゃん今年も、ワールドカップもあるんだ。通常のフットボールのシーズンも五月には終わるのですね。

以前、マドリッドの水の公園の計画のことを書きました。マドリッドから南に下ると、リラクゼーションパークをつくっているトーレビエハという街があります。その内陸にムルシアという古い都市がありまして、今度またそこに公園をつくることになりました。

旧市街は、中世の香りが色濃く残り、大きな教会堂の前には、ちょうどよい大きさの広場があります。そして広場に正対して市庁舎があり、そこから街路が四方八方に延び街がひろがっていくという、典型的な古いヨーロッパの街のつくりをしています。市の外縁、東側には、既に文化公園がつけられていて、コンサートホールや美術館が建てられます。我々の敷地は、反対の西側で、レクリエーションの公園ということですが、何をつくるかというガイドランスもありませんし、プロゲ

ラムも一切決まっています。求められているのはただひとつ、世界に誇れる公園にしたいということだけです。建設予算も決まっていなければ、スケジュールも決まっています。

ひとつによつては、こんな漠然とした依頼を信じられないかもしれませぬし、ありえないと思つたかもしれませぬ。実際に、これが日本の自治体だったらありえないことです。ひとりの建築家に、身を委ねることなどできないだろうし、仮にできたとしても、そうするだけの勇氣はないと思われませぬ。何々委員会というようなものをつくつて、中庸な整備指針でもつくり、多くの人が賛同するものをつくるほうが、あとで表立つて苦情は来ませぬからな。その結果、どこにでも同じようなものができますし、他と違つものは淘汰されてしまひます。

スペインでいつも驚かされるのは、よいものはよい、という原則が貫かれていることです。建築家に対する信頼が厚いです。逆に、建築家は、パブリックということをし、いつも考える必要があります。プライベートな建物でも、パブリックなコンセプトが必要です。学校でもそういうことを教わります。日本では、建築は違つたものです。パブリックと言えは、公共建築で、それは経済活動を維持するためのものであつて、必ずしも文化活動のためのものではないのです。信頼もなければそれに応えるパブリックなコンセプトもない。でも、これは建築だけのことではないかもしれません。そういうものが基本にないのかもしれませんね。

そんなこんなで、ついついスペインへ行つてしまつたのですよ。ついでにオリブもおいしいですからね。

(篠崎健一)

何度目かを忘れる程、またまた「チャンドラー」に嵌まつている。実際はチャンドラーというより、チャンドラーの描く「マールロウ」、その「探偵フィリップ・マールロウ」にド嵌まりなのだ。しかし、よくよく考えると、ハレー彗星が地球に近づくように周期的に嵌まつているわけではない。正確に言つたら、初めての「マールロウ」すなわち「Farewell, My Love」さらば愛しき女よ」に出くわした中学生の頃から、今この瞬間も嵌まり続けているのである。「こんな時、マールロウならどう考え、行動すんだろ?」つてのを中学生の頃から考えていたりするって事…。そうか、いつまでも大人に成れない原因の一端はそこにあるのか…。

さて、余談はこれくらいにして本筋に戻る。長いお別れはシリーズ中最大の大作であり、チャンドラーの代表作と呼ばれる事の多い作品。後書きを鶏呑みにすると、推理小説のベストテンなどをやると必ずと

言つて良い程ランクインしてくる作品との事。しかし、そんな事は全く重要ではない。文中に「ライムがレモンのジュースをジンと混ぜて、砂糖とビターを入れれば、ギムレットができると思つている。ほんとのギムレットはジンとローズのライム・ジュースを半分ずつ、ほかには何もいれないんだ。」とマールロウがひよんな事から知りあつた呑み友達から言われるのだが、マールロウは「ぼくは酒に関心を持つた事がない。」と返すシーンがある。なんでも無いシーンではあるが、チャンドラーの「感傷と憐愍の文学」を多いに感じるくだりなのだ。

チャンドラーの長編はことごとく映画化されているがこれも例外ではない。ロバート・アルトマン監督作の映画はオリジナルと筋も結末もかなり違つているのだが、独自の解釈でチャンドラーの世界観を再現した名作に仕上がつている。中でも、猫に関するくだりは必見。因に、チャンドラー自身も大の猫好きらしい。

(小張寅僧)



The Long Goodbye

Raymond Chandler 1953

長いお別れ

レイモンド・チャンドラー

清水俊二訳 (1976年) ISBN:4-15-070451-1 早川書房



Naplegenda

Nikola Parov

Tom-Tom Records、2000年、TTCD06



ハンガリー。もちろん、名まえだの何だのといふことは知っているけれど、私の知識は極めて浅薄である。思い出すのはマジック・マジヤールの栄光だったりリストだったりマジヤール旋回だったり。それっぽっち。

しかしながら、なぜだか、私の中にはブダペストの町並みや路地裏の幻影が色濃く存在している。いや、純然たる妄想なんだけれど。

その非在の町の風景や人々の姿に、このアルバムはぴったりのだ。存在しない町や人にぴったりのだ、なんて言い種はふざけているかね。

土着的なものと現代的なものが混在し、ヨーロッパらしいヨーロッパ人のいないヨーロッパ。そんな町。

市場を通りすがったら、八百屋屋台のおばちゃんに人参を差し出され、齧ってみたら、ちよっと甘くてうまかった。こんな妄想が無限に飛び出してくる。俺ってば、前世ではブダペスト人だったのではないか。そんな気は……しない。

(全太)



かもめ食堂

2006年公開(日本)

脚本：監督・荻上直子

原作：群ようこ

出演：小林聡美、片桐はいり、もたいまさこ

たまに映画館に行くなら、ジェットコースターのような映画はもうごめんだ。そのあとの一日が、少し光っていい日になるような静かな映画がいい。

「かもめしょくどう」と、口にしても妙にのんびりと心地よい響き。大好きな小林聡美が出ていて、いったいどんな映画なんだろう?と思いつけた。大きく宣伝はしていないようなのに、密かにヒットしているらしい。

舞台はなぜかヘルシンキ。ここに日本人の女性サチエ(小林)は小さな食堂を開いた。なぜフィンランド??そのいきさつはここではあまり重要ではない。サチエはおにぎりやシャケ、トンカツや生姜焼きといった日本の普通のメニューを毎日用意して、お客さんを待っている。まだまだ人は来ないけれど、「真面目にやっていたらいつかやってくるはず」と、しゃきと背中を伸ばしてきちんと毎日を送るサチエ。そこに、日本からぶらつとやって来たミドリ(片桐はいり)と、マサコ(もたいまさこ)が偶然の出会いから食堂を手伝いはじめ。

この二人がまだそこはかとなく可笑しくて、可愛くて、笑わせてないのに笑える。まずマサコ登場の場面で、港でカモメにエサを投げる姿。そのきまじめな投げ方と伸ばした後ろ足(?)に吹き出した。アキレス腱でその役の人となりを表せる役者はそうはいないだろう。ミドリの片桐はいりは、大きな顔とうらはらにどこか繊細で不器用なお姉さんを好演している。

最初から最後まで、特にすごい事件も、どきどきするような恋



物語も山場もない。ただいくつかのエピソードとともに、淡々と三人の日々がつづられて行く。そして、不思議とお客さんが増えて行く(フィンランドの人がすごく上手にお箸を使うのにはびっくり)。

たとえば、この映画の中でできごとのように、港で突然知らない人に猫を預けられて、決めていた帰国を延期したり、いきなりガツチャマンの歌詞を尋ねられたことから知り合いになったり、せっかくなで森で採ったのに全部落としたキノコがなぜか無くしたスニーカーの中から出てきたり、考えてもみないような不思議と偶然で人生は変わってゆくものかも知れない。けれど、それはもしかしたらある程度自分の見えないチカラで引き寄せていて、サチエががらんとした店で毎日笑顔でお客さんを待っていたように、心映えさえ良ければ、毎日まんざら捨てたものでもないのかも知れない。生きて行く姿勢ってきつと大事だ。自分の向きが人生を変えてゆくのだ。

力みや決意ではなく、とても優しく気分よく前向きな気持ちになつて、私は映画館をあとにしたのであった。私の映画選びの基準にまったくぴったりの映画であった。

そして、この映画は空腹で観ない方がいい(いや、空腹の方が効果的かも?)。あんまり美味しそうできつとお腹が鳴ってしまふ!

私は、迷わずその足でおにぎりを買って新宿御苑に行ってしまった。コンビニおにぎりだけ。

(長井理佳)

What's my name?

竹橋の近代美術館で『藤田嗣治展』をやっている。パリで暮らした藤田は作品に“Foujita”とサインした、“Fujita”ではなく。もしかしたら発音に忠実にしたのかもしれない、後者では[フジタ]と読めてしまうのだ。これは英語でも同じで、一部の知っている人を除けば、Mt. Fuji は [マウント・フュジ] である。

日本人の名前のアルファベット表記は、ほぼ例外なく「ヘボン式ローマ字」に依っている。しかし、それがどう発音されるか。私は「もちづきまさとし」で、Mochizuki Masatoshi。英語的にこれは [マチツキー・メセターシ]。それが現実。そこで今こそ考え直したい。俺の名前はマチツキー・メセターシだったのかと。

違うよ、そう思うなら、文句無く奴らにそう発音させる綴りを考案せねばならない。そうだ、似たような発音の単語を探してみても組み合わせよう。

英語の母音にはアとウ、エ、オの中間音があるが、それぞれ [mass] のように表記した。

「モチ」は watch [ウオチ] と似てるから match。これでいいでしょう。

「ズキ」は、zuki だとどうしても [ズーキ] になっちゃう。macintosh に倣って zuci? いや、こいつは [ズーシ] っぽい。そこで野菜の zucchini なら [ズキーニ] と発音。よっしゃ zucchi だ。イタリア風のつづりはそれなりに浸透しているし、c を重ねておけば [ズチ] とは言われまい。[ズッキ] と言われちゃうかもしれないが、[ズーキ] よりはまし。

「マサ」は、masa だと a がどっちもアとエの中間音になっちゃう。「大虐殺」の massacre に倣って massa にすれば [メサ]。それでも頭がやっぱり中間音。ならば mussa ではどうか。やっぱりアとウの中間音だが、[ムサ] は [メサ] より近い。

さて、ss の後ろを替えてみたらどうか。「ムツソリーニ」Mussolini は実は [マサリーニ] と発音する、ってことは、いや、ないようだ。

この際「マストシ」で良しにするか、それとも。そもそも言いにくいわけで、けっこう友人にもそう呼ぶやついるし。だったら「イスラム教徒」Muslim とかどこでも見つかる mus でいい。とそんな感じで辞書を見ていると、同じ「イスラム教徒」に Mussulman [マスルマン] を発見。ssu のところはサとスの中間音。Muslim や「筋肉」の muscle に比べても母音がきっちりあるのでこれを採用。mussu。

「トシ」は、前述 macintosh のように i を取ったからとて、[タシ] と発音されてしまう。んー、これがけっきょく見つからない、toesh とか、どうしても [トーシ] 止まり。誰かわかる人、教えてください。

とまあ、そんなわけで出来上がった作品がこちら。

Matchzucchi Mussutoesh

苗字・名前、それぞれパーツを組み合わせても、影響は出ていないと思う。現状、実証してくれるネイティブ・スピーカーが辺りにいないので真偽のほどはわからないけれど。

(望月)

(一面から続く)

ら、それなりに生産的で結構なんじゃないかねという気もするけれど、その一方で、十分な睡眠をとって万全の体勢で望んでこそ良いものが生まれてくるのではあるまいか、という疑義もあり。まあ、こんなことで思い悩んでいるのが何よりも非生産的なんだろうけれどね。しかしながら、そんなことを言い始めてしまうと、私のやっていることなんぞ、どれもこれも、だからなんなんだよ、と批判の暴風にさらされざるを得ぬような代物ばかり。ちいとも世の役にたんとぞ立ちやしない。精々の言い訳が、「無用の用」ってなことを仰った大人が戦国時代だか何だかにおったではないか、と。尤も、貴様の為すことの何事かが、無用の用に相当するの否か、と問われたなら、それには何とも答えようがない。私には判らない。貴殿にも判らない。誰にも判るものではない。ま、単なる無用でしかない可能性は高からうけれど。

君という人は、よくも、まあ、そんな判然としないことをしてばかりの判然としない毎日を送っていられますね。嫌になりませんか。そんなことを思う人もいるだろうけれど、余計なお世話でございます。結局、好きなのである、この判然としないふらふらとした自分が、好きなことをやる。畢竟、生とはこれに尽きるのではないか。そう思う。

そう思うのだけれど、人間というのは群棲する生き物であり、銘々の望むところの利害が相反してしまうことが間々ある。これが問題だ。そこで群れには法律という明文化された掟や、道徳や良識という明文化されてはいない掟が用意されており、自らの心の望むところと社会に広がる掟とを照らし合わせ勸告しながら、他人様に迷惑を掛けず、しかも、自分自身、最大限に楽しむところを目指すこととなる。そこには生物としての本能なども絡み合ってくる訳で、考えてみれば、日々何気なく生き

ているようで、随分とややこしい作業をこなしているのではありませんか、人てえものは。大したものだ。

けれども、こんなのは人の世界に限った話ではない。で、猫には通じませんよ。通じませんとも。丑三つ時であるとも、腹が減れば、鈴をちりりんと鳴らしながら現れて、はよ、めし出さんかい、と攻撃してくる。こちらも意地になって寝た振りをして對抗したりするのだけれど、あのもわもわとした巨体で胸の上に攀じ登られれば、胸苦し、その鳴き声は、時に威圧的に時に哀れに、何時いつまでも止むこと無し。結局、根負けして、起き出さざるを得ない。こうして、私の睡眠不足は続いていくのであるにやあ。

(全六)

編集後記

からす新聞第八巻四号(通巻第八八号)、無事、発行できました。新聞に限らず、これからも新企画目白押しなので、みなさんの御協力をお願いいたします。御意見・御要望をぜひお寄せ下さい。次号発行予定日は二〇〇六年五月二十五日です。編集協力者、特派員記者、及び、投稿を熱烈にお待ちしております。



Ken-ichi Shinozaki, architect